震災で学んだこと

の衝突」との第一印象を持った。 異常な地鳴りに飛び起き、震度五を体験 した。テレビは、破壊された都市を映し い気持ちを高めてしまう。 その後、私は次第に歯がゆい思いや梅 した。その瞬間、私は「自然と不自然 私は京都の自宅で と人間が作

異常と正常

面張り河川 高速道路、堤防、三 かったものを次々と作りだした。家屋 征服してきた。そして、自然界にはな 人間はこれまで、 高架鉄 自然と対決し、自然

って手酢く痛めつ

秒たらずの激震に

それらが一

るようになり、私は「ちょっと待てよ」 ペットが異常に のカラスやトビ、神戸の食品倉庫のネズ 日から異常行動をしていたとか、淡路島 ない「不自然」の衝突である。 農法はど大きな被害を受けていたはずだ。 説が田園地帯を襲っていれば、不自然な 。その後、須磨海浜水族園のイルカが前 あるいは被災地家屋の犬や猫などの ようになった。この理解の仕方で 動をしていたと報告され 地

> 動をしていたのではないか。 然の変化に気づかず、呑気に不自然な行 たのか。むしろ私たち人間のほうが自

られた。天災という「自然」と、「人間

りだしたモノ」つまり自然で

ドジがいたに違いない。逆に、異変をい 面しながら、まともな指揮のできないリ ち早く感知したのもいたはずだ。そのい へ導くのが役割だろう。もし、異常に直 早く気づき、 れを正常と見るか、 もちろん、ネズミやカラスのなかにも ダーは、 そこが問題だ。

一族郎党を安全なところ 自然の変化を一刻 少



界では一発でクビだ

の下に再結集す

新

ダーがいたら自然

業民への同情 るかのいずれかだろ 動にでるか、 一族郎党は勝手な行

に跡のような都市を

しているのか。

住民は

人間が作り出した高速道路は一瞬のうちに、自然の力によって倒壊した

機転と初動

がらせたのではないか。 もしそうだとす

への人びとにボラ

れば、同胞を思うごく自然な行動だろう。 ンティア活動や義援金募集運動に立ち上 人たちへの同情が、多

人は突然窮地に追い込まれると、本能

立ちはだかられ、まるで見捨てられたよ ず、外国から差し伸べられた手の前には とのこの意向を 医師や救援隊を拒んではいない。だが、 と期待している。被災者は決して外国の 外国の医師や救援隊の世話になれるもの 人が海外旅行をしている。当然旅先では ダーは瓦礫の下で苦しんでいる人び わが国では、人口の一割以上 んでいない。 Š

らずに多くの人びとが力尽き、焼け死ん した救援申し入れがあったことすら知 うな人びとを映し出していた。こうした テレビは、打つべき手を打っても

ている間も、現場では火災が広がり、

の収容能力が備わっていた。 人の医師、大勢の救助隊、二〇〇〇人

-ダーが外国の救援隊と押

し問答をし わが国の と数 米軍空母インデペンデンスの前にも… 諸外国の救援申し入れの前に立ちはだか 国のリーダーはその

は早かった。わが

いた。諸外国の動 いた頃、スイスの わが国のリーダー し出した。 テレビは爆撃され

救援隊は行動に移っ が事実把握に腐心し

その空母には数十機のヘリコプター った。救助犬の前にも、医師団の前にも、

なほど静寂を保ったようだ。一○分ほど かモラルのいずれかで行動するという。 してから電話がかかり始め、□○分後に 震災直後、多くの消防の電話は不気味

はパニック状態となり、機能しな 一〇分から二〇分以内の初動、その ーダーはどう判断し、行動するか

は機転だ。芦屋市に、機転が二次災害を なかったという。時間との戦いだった。 以降は生きて救い出せる人はほとんどい 初日は五対一の割で生存者を引き出せた **軽減した例があった。同市には消防署の** 人命救助に当たったある消防によれば 芦屋には六甲山から大阪湾に注ぐ急気 分団の動きが好例だ。 し町火消のような消防団があるが、 も大切なものもあった。それ らにその率は逆転し、 五日日

吸水ダムを作り、火災に備えた。 造園業)は土嚢を宮川の三カ所に積んで 配の河川が三本ある。岩園分団ではその 副団長の松浦信行さん(四五歳,生業は つ、宮川からの取水を思いついている。 一つのダムから四〇〇メー

を続け、延焼を食い止めている。 宮川の水だけで三日間にわたる消火活動 の防火用水も半時間で底をついた。 ルさきの民営高層住宅から出火した。 火栓は一○分ほどで水が切れ、四○

ダムが生きる。 日の深夜、さらに二〇〇メー て燃え続けるが、類塊を防いでいる。当 なく消し止めている。 六時半には二〇〇メー 民家から出火したが、 出火した民家は翌日ま トル上流に作っ n

ほんとうに良い子とは

日は別人だった。造園会社のチェーンソ たっていたのだ。 に帰ってきた。ぶっ通しで救援活動に当 やスコップを持って飛び出し、三日後 当時を振り返る。いつもは「どう 松浦さんは「良い子 もないヤツ」と思っていた青年が、 とはどんな子か」

動けないのだろうか。 「髪を染めたヤツとか暴走族のほうが」前 たのは常日頃のエリ 子がよく働いてくれた」と語る。異常時 日頃は「つまはじきにされていたような 教出活動に当たらせている。その場合も 造園業用のユンボやレッカー ていた人は突発事態では委縮したようだ。 正常時に、マニュアル通りにうま に飛び出し、動きも早く、 「優先順位を、自分の頭では決められん 団員には五人一組で三組を編成させ、 自分の頭で判断し、テキパキ しょうな」という。指示がなければ トではなかった。 応用もきいた を使わせて 動い

に無慈悲となっていたのではないか。 たのではないか。そしてほんとう あるいは繁殖などを繰り返したりして 自然の法則を無視したような選択や行動 け離れた、たとえば淘汰や優勢遺伝など を押さえ込んだり、自然界とはおよそか を感知したり異常に即応したりする能力 どうやら私たちの社会は、自然の異常

> 親心と判断した親もいた。 たといって喜ぶ親がいた。逆に、子供に 生活をしながら、家族の心が一つになっ 簡素な生活体験をさせるチャンスを捨て に通えるところへ引っ越すのが親の力 被災地の傾いた家で、不便この上ない

死体を見た人に出会っていない。 なお、私はまだ、震災地で野生動物の

ブライオリティ

チゴやナスの季節をなくし、 冷暖房機器で気温を変え、温室栽培で えずりをテープで年中流し、 葉が出ない造木を作り、 をしていた。蛍光灯で昼夜をなく マトの色や形を統一し、

で何が思典なのかを忘れさせ、

ストラテジーと これまで私たちは、平気で不自然な

然とは思っていなかった。 春の小鳥のさ 虫がつかず落 それを不自 キュウリ

私たちの社会システムは、何が本来の姿 は栓をひねればいつでも、固定料金で出 らない。それで当たり前だと思っていた。 ック一つで流れ去る。その後も、前も知 その典型はライフラインだ。水やガス 電気はボタン一つでつく。屎尿はコ 便利さと



教助にかかる時間、日数が延びるごとに生存者を救い出せる確率が低くなっていっ た。写真は倒壊した民家の下敷きになった住民を捜索するスイス救助隊と捜索犬

切れない異変が襲いかかり、 私たちは本能にもモラルにも欠け をしていたのかもしれない。 た。そこに、人間の力では押さえ あるいは目先の損得で判断さ とほうに

植物の威力

式会社の緑化事業部統括役員の木田幸男

六日にかけて、

(四五歳) だ。

一月二十四日から二

人がいた。大阪に本社をもつ東邦レオ株

被災地で樹木を

く調査している

求められたわけだ。 度の震災では、こうした判断が突発的に だけなのにストラテジー ちの多くは、たとえば庭の草抜きをする 常とし、何を優先するのか、 わが家では過去に、アメリカ を尋ねた。戦略と優先順位だ。何を ムステイしている。 とプライ F. 10 彼女だ

> 本殿は傾き、石灯籠の多り 灘区の住吉神社では神殿や塀は倒壊し 全城の古木から生け垣までを調査し

先順位を決めているようだ。 で、「死んだ人より生きている人を優先」 民間人に独断で貸し与え、「二人一組」 本部では「鈴木(消防署員)は独自判断 人はどう扱うかなど、震災時の戦略や優 リカでは、足を挟まれて引き出せない 民間人を組織していました」と聞かさ 指揮して救出活動に当たっている。 る消防署員は、一つの倒壊家屋に留 彼は消防車に積んでいた資器材を 率に引き出している。 そこの家族を手伝って遺体を一体 芦屋市消防

同様に直接の被害から免れ、

果の関係に目をつけていた。

ておらず、

影響が見られない」といったメモにスナ 柿の大木をはじめ庭の樹木にはまったく

ップ写真をつける方式で記録を残し、

例が多々あった。その時、あそこには「オ た青年や主婦など市民の機転で救われた 夜動でいない」などと叫び合えたことが決 この度の震災は、にわかに立ち上がっ ちゃんがいた」とか、あの人は「昨夜は なって成果をあげている。

> 夫は多々ある。植物を都市の装飾物とし 梐 展 だろう。雨水を生かし、 異常を感知しやす 浸透式にする。井戸を普及し地下水脈の 舗装は地下水脈を狂わせない雨水の地下 込み、野生の動植物が自生できる空間だ 土の本質を生かすビオ 小川や池を組み など プ化こそ肝要

面や窓辺にツル性植物を組み込むなど

上の庭園化、芝屋根など屋根の緑化

植物の生かし方としては、街路樹

自然や自然の力の取り込みだ。

化されて日々の健康に良い。四季の移り

広さや樹種もさることながら、

緑と水と

植物には水と土がつき いの発想の転換が求められる。

ものだ。

異常に敏感な野生動物とも身近に付き合 が市街地のヒートアイランド化を防いで らに、蒸発や蒸散あるいは凍結作用など 変わりに敏感になれて情操にも良い。さ えるようになり異変も感知しやすい。し なお、屋根の生かし方は、緑化の他に れるし冬は温かくしてくれる。また、 り防災効果まであるわけだ。

恵みの取り込み方は多々ある。 雨水の涵養やソーラー発電など自然の

都市再生

「地球」対策や「人間」対策が迫られて 年か前、つまりバブルの前に起こってお 都市は「地震」対策だけでなく、都市の 深刻なほど病んでいる。もはや地球に寄 てていたのではないか。 れば、今頃は反省しきりの復興計画を立 いるわけだ。仮に、この震災がほんの何 するような都市や、その都市に寄生す 向けるのは不自然だ。むしろ、都市の 当然、何百年かに一度の「地震」とは り方自体を見直すべきだろう。地球は きな生き方は許されない。つまり、 え備えは大切だ。しかし震災だけに目

都市作りを求めている。まず未来を見通 た理念の確立が急がれる。 政府の危機管理能力や地震保険が 二十一世紀は、環境問題と矛盾しない

ろ政府は限りなく小さくし、 地震保険よ ぬんされているが、これもどうか。む

> (大垣女子短大教授・もり たかゆき) えた自然との共生にあると思う その秘訣は、太陽の恵みの範囲をわき

えある 所得の数パーセントにも達している例さ 団体への所得控除された寄付総額が国民 の給与所得者などを作り出す じない地震のために長年にわたって大勢 テムの確立を優先すべきだ。めったに生金処理を制度化するなど、相互扶助シス システムは不合理だ。欧米には、非営利 も、たとえば、義援金の所得控除や損

はなむけではないだろうか。 世界が「神戸方式」と呼ぶまでにしては 再生のチャンスと位置づけてはどう はずだ。この度の震災を、そうした都市 然への畏敬の念を深め、何が正常なのか 成果を細大もらさず随時公表させ、 を取り戻すことが先決ではないか。 絆や同胞愛や郷土愛を高め、自己完結性 バランス感覚や自立心を強くし、家族の 感受性を磨き、 これを機に、次代の模範都市を創出し、 れが、さらに強い地震だってありう リーダーは、研究者には研究成果や不 組む心を養うことではないか。そして 大切なことは、私たちが自然に対する うか。それが大勢の犠牲者への最高の と正常が見分けられる人びとに育てる し方は納税者にまかせたらよい。そ 自然現象に敏感となり、異 自然現象と真正面から取

ような社会

1995, 7 ●月刊公論